

# 裏妙義・裏谷急沢 2015/05/23

メンバー：落合（CL）、大曾根（SL）、飯野

裏谷急沢出合 7:45 谷急山 11:20 11:45 裏谷急沢出合 13:00

今冬、アイスクライミングでツメた沢を今度は沢登りで行ってみようと西上州からシーズン・イン。

暑い日が続いているのでそろそろヒルが出そうだなと車道で身支度の準備をしていたら、いきなり大曾根さんのサンダルの中に登場し洗礼を受ける。（当日、安中市は 30℃の夏日となった）

ジョニーを買いそびれてしまったので、自作の食塩水を大量に吹きかけて出発。

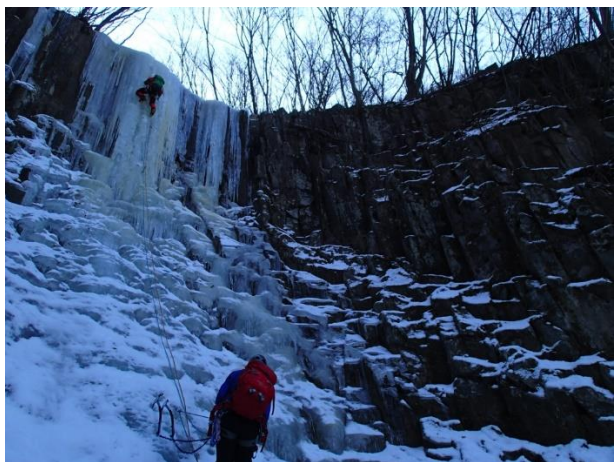
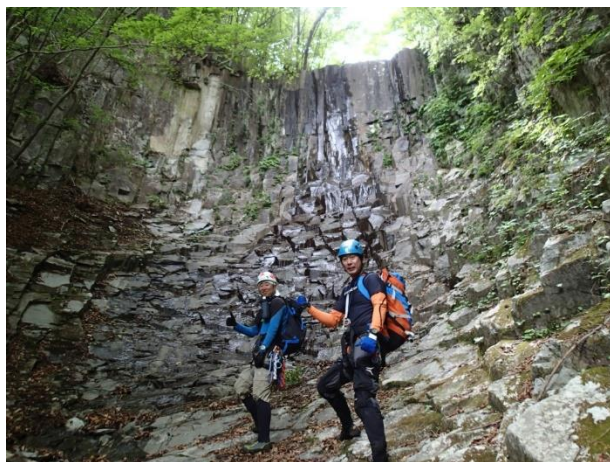
入山川の流れは細くここがほんとに裏谷急沢なのかと思える程水量が少ない、出合は伏流。

沢床は落ち葉で隠れ気味の所が多く特筆すべき所は特に無いが、ノーロープで終わってもつまらないので下部の三段滝上部でロープを伸ばす。

冬に登った時は氷の状態が甘くベルグラでランナウトしながら苦労したので、今回は右からへつり気味に登ったが、2・3 手ヤラしい箇所があったので練習のつもりでも気は抜けない。

核心の大滝は柱状節理で雰囲気もあり見栄えがするが、水量が少ないのでまるで堰堤のようだ。

アイスで登った時は右から登れそうな気がしていたので、カムとハーケンを持参して登る気満々で来たが、実際に近づいてオブサベしてみたら上部は被りプロテクションが全く取れず諦めて右から巻いた。



溪谷美を変える柱状節理大滝、（右は 2014 年 1 月下旬）

冬の方が氷が繋がっている分迫力があるが、無雪期の方が滝としての大きさを感じる。

柱状節理の岩は脆く両岸の岩は今にも抜けそうな岩がある、上部のナメは傾斜こそ緩いが滑ったら止まらないので乾いている部分を拾い三俣が近づいてくるともう源頭に近いが、潤いが無いので登山道を歩いているようで身体が火照った。

沢床は落ち葉で埋まり滑りやすいので本流沿いに登れず巻き気味に三俣上に出たが、ここで恐怖の出来事が起きた。

ラストで登っていた筆者が小さい浮石を落としてしまい、下にあった大岩（とても浮石には見えない岩が動いた！）にカツンと当たり落石を誘発。ナメを爆音立てながら雪崩のように滑り落ちていった。

あまりの予期せぬ出来事に3人とも絶句、後続パーティーがいたら大惨事になりかねなかった。

三俣付近は落ち葉に隠れて少し分かりづらいが浮石雪崩の巣になっていた、シーズン始めということもあるが時期が進んでも両岸の岩質自体が脆いのでさほど変わらないように思う。

源頭部のナメも同じような状況で尾根から拾い登山道に出たが、上部も浮石が多く時折落ちそうな岩を何度も止めながら慎重に登った。

下りのナイフリッジ尾根は冬に比べれば木々が生い茂っているので筆者は思ったほど高度感は無かったが、岩の状態は沢と同様に浮石が多く違う意味で最後までハラハラ・ドキドキさせられた。

裏谷急沢はガイドブックにも掲載されている比較的認知された沢でグレードも確かに記載されている程度だと思う。

しかし沢のグレードと不確定要素は比例しないと痛感、大滝上部の状態は浮石が堆積しており非常に悪いと断言出来る。

この沢特有の急峻な地形が最大の理由だが、ナメという滑り台の上に今にも落ちそうな岩たちがスタンバっている状態だからだ。地盤の状態や登山者の通過で落石を誘発する。

妙義は錦秋の頃が素晴らしいので不安定な浮石が落ち切った秋の遡行がいいと思うが、妙義山塊は年々岩が脆くなっている事を考慮すると、リスクは時期をずらしても大きな変化は無いだろう。

詳細を記述すると、大滝左上部の岩は今にも抜けそうな大岩があり、大滝の巻きでみるいちばん右側の節理、三俣下部の周辺が非常に不安定。

両岸から浮石が集まってくるので落石が落石を呼び、規模も大きくなる可能性があり要注意。

冬は氷や雪で隠されていたせいか、安定しているように見えその点は全く気付かなかった。

あまりにヒドい落石だったので過去の記録をググってみたが、「入渓前に準備中、沢から正体不明の爆音が響いていて、その後も爆音は位置を移動しながら定期的に響いていたけどアレは一体なんだっただろう！？」なんて記述を見つけたので、どうやら今に始まったことではないようだ。。

裏谷急沢へ行くことを検討していて、この記録を読んでいる方がいるとしたら今後は是非自粛して頂きたい。

山であんな恐ろしい気持ちを味わうのは二度とゴメンだし、この先事故が起きないことを切に願うばかりだ。

(記録：落合)